
夏の思い出…

GARAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の思い出：

【Nコード】

N3280C

【作者名】

G A R A M

【あらすじ】

夏休みに幼なじみ4人で心霊スポット巡りを開始したが予想外の出来事が起こる…

プロローグ 人物紹介（前書き）

この話は半分フィクションで半分ノンフィクションです。小説内に
出てくる人物名及び地名は仮名です。

プロローグ 人物紹介

名前	雨宮 雫
ヨミ	アマミヤ シズク
性別	女
年齢	17
身長	167
体重	52
髪型	セミロング
髪色	黒髪
容姿	幼さが残るが美形
職業	高校三年生
紹介	どちらかと言うと内気な性格。天地 玲と付き合っている。雫と海と同じ高校。玲も雫も海も幼なじみ。霊感が強く見ることが出来る

名前	天地 玲
ヨミ	アマチ レイ
性別	男
年齢	19
身長	183
体重	72
髪型	ショート
髪色	金髪
容姿	男らしい男前
職業	社会人一年目
紹介	雨宮 雫の彼氏。雫だけでなく他の人にも頼りにされている

る。靈感は少しあり、霊を感じることが出来る

名前	山内 滯
ヨミ	ヤマウチ ミオ
性別	女
年齢	18
身長	159
体重	45
髪型	ショート
髪色	銀髪
容姿	幼さが残るが美形
職業	高校三年生
紹介	明るい性格で恐いモノ知らず。靈感は全く皆無。山里海と付き合っている

名前	山里 海
ヨミ	ヤマザト カイ
性別	男
年齢	18
身長	184
体重	79
髪型	セミショート
髪色	黒髪
容姿	美形の男前
職業	高校三年生
紹介	山内 滯の彼氏で、とても靈感が強い。見る、話す事が出

来る

第1話 心霊スポット

7月18日

AM 9時30分

雫 『今日から夏休みだね』

澪 『そうだねッ♪』

雫 『四人で海とかプールとか行きたいな』

澪 『あっ玲と海が今日の12時、玲の家に集合だってさ』

雫 『おっけい』

プルルルル…プルルルル…

雫の携帯が鳴りだす

雫『もしもし』

玲『雫、今日暇かな？』

雫『もう濤に聞いた。また連絡忘れて！もう知らない』

ピッ

濤『玲、可哀想…笑』

雫『いつもの事でしょ？』

滯『まあね笑』

雫『じゃつまた後で』

滯『またね』

そう言うとき雫は自宅へ入っていった

雫『ただいまあ』

母『お帰りなさい』

雫『あつ今日玲の所行くから』

母『相変わらずアツアツねえ笑』

雫『もう、お母さん!』

母『何恥ずかしがってるの? いいことじゃない。あつご飯出来てるからね』

雫『わかった。着替えたら食べるよ』

自室で着替えを済ませご飯を食べ終わった雫は玲の家に向かった

ピンポーン

玲『はいはい』

ガチャッ

雫『お邪魔します!』

玲『しずちゃんごめんよお…許してちょ?』

雫『謝るときにふざけない!』

玲『うゝ』

雫『雫、そんなくらいにしといてあげな』

海『海は雫はまだかなあ…って心待ちにしてたんだぞ?』

玲『余計なこと言わない!』

雫『まっいいや許してあげる』

玲『ありがとう!』

玲の顔が雫の顔に近付く

雫『流れに任せてチューしようとしな!』

パシッ

玲『NO〜!』

雫『もう!痴話喧嘩しないで早く本題にはいようよ!』

海『だな』

玲『それもそうだな』

雫は玲に手を引かれ部屋に入った

雫『なんの用なの？』

玲『夏と言えは？』

雫『プール』

雫『海水浴』

海『怪談話』

玲『海の怪談話、惜しい!』

雫『肝試し』

雫『お化け屋敷』

海『心霊スポット巡り』

玲『海あたりい。心霊スポットで探検♪』

雫『暇だし…いいね』

雫『大賛成♪』

海『愉しそうだな』

玲『じゃっ決定♪20日の夜8時ここ集合♪』

みんな『了解♪』

第2話 スポット紹介

7月20日

PM 7時50分

ピーンポーン

玲『鍵開いてる』

ガチャ

海『お邪魔します』

玲『よっ海』

雫『こんばんは』

海『おっす。滯はもうちょいしたら来るから』

玲& a m p; 雫『了解』

5分後

ピンポーン

玲『開いてる〜』

滯『お邪魔します』

雫『相変わらずギリギリね』

澤『間に合ってるから問題ない♪』

玲『まっこれでメンツ揃ったな…よし！。行くか！』

みんな『お〜！』

ノリノリで車に乗り込んだ4人は一つ目の心霊スポットに向かった

ついでに今日回る予定の心霊スポットは5つで

一番初めは《呪いのトンネル》と呼ばれているトンネルで女性の呼び声が聴こえると言われている。呼び声が聴こえたらトンネルを出るまで止まっていけないらしい

次は《黄泉の井戸》と呼ばれている井戸で、奥を覗くと多数の手が伸びて来てあの世に引きずり込まれるらしい。助かる方法は『井戸

の手』と叫べばいいらしい

次は《血塗りの壁》と呼ばれている壁でなんの後かはわからないが壁に多数の血の手の跡のようなものが残っている。子供のうめき声が聴こえたら逃げないと死ぬらしい

次は《身投げの吊り橋》と呼ばれている吊り橋で自殺の名スポット

最後はこの辺りで最も有名な《霊界屋敷》見た目は廃墟だが言葉にならないくらいヤバいらしい…

第3話 呪いのトンネル

7月20日

PM 9時10分

玲『着いたぜ…初めの心霊スポット《呪いのトンネル》の前に』

漑『むゝ全然わかにゃいぞ?』

玲『まっ漑は全く霊感ねうからな。感じ的には背中がゾクゾクする感じだ…』

海『声が聴こえる…』

玲『なんて?…』

海『来るな！ 寄るな！ ここは私のモノだ！ 誰にもやらない！ だってさ』

雫『やめたほうがいいんじゃない？…』

玲『止まらなきゃいいんだろう？』

海『無理だな…』

澪『えっ？…』

海『霊体の数は1体2体程度じゃない…10…いや…20はいるな…止まりたくなくても止められるな…』

澪『ん…イマイチ霊って信じらんないから実感沸かないなあ…』

雫『いるよ…いっぱい…トンネルの入り口で5人手招きしてる…』

玲『確かに感じるけどそんなに居るのか？』

雫『うん…』

？【ダメだ！入っては…いや…近付いてはならん！】

雫『えっ!?!』

玲『雫？どうしたんだ？』

？【入れば最後…二度と太陽を拝めなくなるぞ！】

雫『声が聴こえる…』

玲『…なんも聞こえないぜ?…』

海『とにかくココはヤバイ…次行こう』

玲『しゃあない…わかったよ』

雫【あの声は?…まだ…聴こえる…】

玲『雫?ごめん、怖かった?』

雫『えっ?ううん全然、大丈夫だよ』

玲『ならいいけどさ』

第4話 黄泉の井戸

7月20日

PM 9時30分

山道を一台の車が登って行く

無論、雫達の車だ

雫『うゝ…酔ってきた…』

玲『おいおい…もうちょいだから我慢しろよ？吐いたら怒るよ』

雫『うゝ後どれくらい？』

玲『このまま車で2分くらい進んだ所にちょっと開けた場所があるんだ。そこでUターンして徒歩3分ってところかな』

雫『歩き!?!』

玲『車じゃ入っていけないんだから仕方ないだろう?』

雫『それは…そうだけどさあ…』

玲『つと着いたぜ』

玲は車をUターンさせみんな車から降りた

玲『行くぜ?』

みんな『了解!』

足場の悪い山道を進む事5分

玲【あん時は男だけだったからなあ…女が居るって事考えてなかったぜ…】

玲『ここだ』

既に井戸の淵は崩壊していてライトで照らさなくてはわからない状態

つまり地面に穴が開いているだけになっていた

漣『うわぁ…危なすぎて近付く気になんないよ』

海『デマ…だな』

滯『?』

雫『何も感じないもんね』

玲『雰囲気がいけどな笑』

確かに鬱蒼とした森の中にライトで照らさなくてはわからない穴…
怖い要素は十分だ

滯『なあんだつまんないのお』

玲『無駄足だったな、次行くか』

雫『また山道か…嫌だなあ…』

玲『ならここにいる？笑』

雫『もっと嫌！』

第5話 血塗りの壁

7月20日

PM 9時50分

漣『次なんだっけ?』

海『《血塗りの壁》だな』

漣『名前に一番ヤバそうだよね』

玲『色々心霊スポット行ったことあるけど《血塗りの壁》《身投げの吊り橋》《霊界屋敷》は初めて行くからなあ』

雫『そういえば《呪いのトンネル》も《黄泉の井戸》も正確に位置知ってたもんね。車止める場所とかも』

玲『でも《呪いのトンネル》は入ったことないんだよなあ』

雫『入らなくていいの!』

玲『はい…っとそろそろ着くはずなんだけどなあ…どこかな? 暗くてよくわからん』

漑『あっあれじゃない?』

漑の視線を眼で追うとその先には何に使用されていたかはわからないが大きな壁らしきものがあつた

玲『暗くてよくわかんねえけど…確かにそうっぽいな』

車を止めて4人は壁の側まで行きライトで照らしてみた

玲 『血塗るか…なる程ね…確かにそう見えんこともないが…』

海 『ペンキだな…』

漣 『つまり…イタズラ?…』

玲 『って事だな、しょうもな、早く次行こ』

雫 【ずっと嫌な感じがするんだよね…それと…声が…】

玲 『雫、早く来いよ、置いてくぞ?』

雫 『あつごめん…今行く…』

雫【気のせい…だよね…】

玲『雫?…どうした?…』

雫『…なんでもない…早く次行こう』

玲『?…ああ』

第6話 身投げの吊り橋

7月20日

PM10時30分

玲【雫の様子…なんか変だな…気のせいかな…】

雫『ねっ次《身投げの吊り橋》だよね？』

玲『えっ…ああ…もう目の前に』

4人の視線が目の前にある吊り橋に向く

雫『きゃあああっ！……！……！』

海『玲！止めろ！』

玲『えっ??.』

キイツ

ガクガク震える雫

そして手で顔を覆い頭を左右に振る海

玲『なんだ?..』

海『玲と滯は見えないんだったな...』

滯『何が見えたの?..』

海『はっ！玲！バック！』

玲『またかよ！』

来た道をバックで戻る

玲『なんか掴んどけよ！』

キイイイツ

バックから180°。回転し猛スピードで来た道を駆け戻る

玲『何見たんだよ？』

海『知ってるか？自殺した霊は毎日毎日死んだ時間に同じ行動…つまり自殺する』

漣『毎日死んだ時間に自殺するって事だよね？』

海『ああ…さっきそれを見た…いや…それだけじゃない…』

玲『なんか…あったのか？』

海『吊り橋の下から…幾つもの手が橋に居た男の霊の体を掴んで…引きずり落とした…』

漣『つまり…』

海『《身投げの吊り橋》ってのは間違いだ…何故なら引きずり落とされた男は作業服を着て仕事してるようだった…』

玲『つまりあの吊り橋は自殺しに来た奴だけじゃなくてあの吊り橋

通る奴なら誰でも引きずり落とすって事か？』

海『それだけじゃない…』

漚『他にもあったの？』

海『連れ込もうとしてきたんだよ…俺らを…』

場の空気がさらに重く…冷たくなっていく…

海『手が車を掴みに来たから急いでバックしろ！って言ったんだ…車のフロントバンパーの所に手が触れてた…』

玲『もう…安全…だよな？…』

海『…ああ…何も感じない…』

キイツ

玲は車を止めフロントバンパーをライトで照らし見てみる

玲『…マジ…かよ…』

そこには手の形にへこんだフロントバンパーがあった

滯『さすがにヤバくない？』

玲『どうする？まだ最後の霊界屋敷残っているけど…』

滯『私はどっちでもいいけど…』

海『…』

雫『少しでも…』

玲『?』

雫『少しでも変な感じしたら引き返してくれる?…』

玲『当たり前だろ?』

雫『なら…いいよ…』

第7話 霊界屋敷

7月20日

PM 11時10分

そして一行は最後の心霊スポット《霊界屋敷》に着いた：

玲『ここだな』

滯『別になんとかとない廃墟じゃない？それも綺麗っていうか…崩壊してない』

雫『確かに…私も何も感じないし見えない』

海『俺もだ』

漣『ココ一番恐いって評判だったんだよね？笑』

玲『そんはずだったんだけどなあ笑』

漣『で何も無し？笑』

雫『みたいだね笑』

海『笑い話になるよ笑』

今まで重かった雰囲気はこの出来事で一気に和んだ

玲『このまま帰るのもなんだし…中探検しねえ？』

漣『おっいいいねえ』

海『確かになんも感じないし…いいよ』

雫『私も全然かまわないよ』

玲『じゃっ決定！玲様 continuéな！』

そして4人は屋敷内へ向かった

ガチッ

玲『あれ？…錆び付いてまわんねえ』

滯『ぬわぁにぃ？それはイカンですよ？笑』

海『こんだけデカイ屋敷なら他に出入り口あるんじゃないか？』

雫『私もそう思うけど？』

玲『じゃつまりは屋敷一周回るかあ』

もう少しで一周回るところまで来てこの屋敷がいかに大きいかわかった

周囲400mくらいの大きさを4方向に一つずつ扉があるみたいだ
と言うことがわかった

今のところ東扉、南扉、西扉は発見できた

玲『後は北扉だけか…』

漣『あるかわかんないけどね笑』

海『多分あるさ笑』

雫『あっあれじゃない？』

雫が指差す方向を見ると扉があった

玲『よっしやあ！』

漣『探検♪』

駆け出す玲と漣を追うようにして雫と海が駆け出す

玲『開くぞ』

澪『ドンと来い！』

ガチャ
キイイイ

玲『開いたあ♪』

澪『GO! GO!♪』

そして4人は屋敷内へと入っていった…

第8話 霊界屋敷は廃旅館？

屋敷内に入った4人を待ち構えていたのはロッカーが大量にある部屋

玲『これ…本当に廃墟？』

漣『ホコリ溜まってるし…そうなんですよ？』

海『何かの準備をする部屋か？』

漣『そうっぽいね』

確かに屋敷内はホコリが溜まっていた…が…破損している建造物は0

誰も使わなくなってからそのままなのだろうか…と言う結論に達した4人はそれぞれライトを持ち更に奥にへと進んだ

奥へ進むと左右に厨房が見え更に進むと開けた場所に出た

そこには一番始めに4人が入ろうとした東扉があった

他にもカウンターらしきもの、その後ろに鍵が大量にある

そして大きい階段が部屋の左右にあり、4人が来た廊下の他に4つ廊下があった

一つは南扉に続くであろう廊下、北扉方向に続く廊下と同じで壁に《この先関係者以外立ち入り禁止》と書いてある

後の3つは南扉方向で真ん中の廊下には北扉方向や南扉方向と同じ事が書かれてある

そして北扉と南扉方向の壁に男女に分かれているトイレがあった

雫『旅館…だったのかな？』

玲『そうみたいだな』

雫『なんで廃墟になったのかな？』

海『場所が場所だからな…土砂崩れを警戒して、とかそんなんじゃないか？』

雫『そっかあ』

玲『二手に分かれて色々探さねえ？』

この玲の提案により
雫・玲

海・濤

に分かれて雫達は二階を濤達は一階を模索することになった

最終話 夏の思い出…

玲『やっぱり破損してる物ないなあ』

雫『ただホコリ溜まってるだけだよね』

確かに廊下や廊下に飾られてる壺や絵なども盗まれたりしていなく、ホコリが溜まっているだけだった

玲『マジなんでこ』

キャアアア！！！！！

玲『え！？！？』

雫『濡だ！！』

ゾクッ

雫『そ…んな…』

玲『嘘…だろ？…』

2人は感じた

恐ろしい霊気を

そして見てしまった…

恐ろしい霊の数を…

雫『来たとき…いなかったのに…イヤだよ…』

玲『とにかく走るぞ!』

雫は玲に手を引かれるまま声のした場所に走って進んでいった

玲『雫! 何があった!?』

雫『…』

雫『雫! 海は!?』

雫『…』

ゾクッ

雫『また!…』

玲『とにかくこっから出るぞ』

雫『海は?』

玲『アイツなら大丈夫だろ…とにかくこのままじゃ俺達は確実にア
ウトだ』

雫『わかった』

玲は濡を抱きかかえると雫と共に北扉へ向かった

雫『待って…今は…ダメ…この先に…沢山…いる』

玲『早く出たいんだがなあ…』

雫『大分と減ってきたから…もうちょつとだよ…』

ゾクッ

雫『玲！早く！』

玲『うわあ！』

不意に霊が後ろに現れ2人は濡を連れ急いで北扉へ走った

玲『雫、もうちょいだから我慢しろよ…』

玲は息切れしている雫にそう言いながら走りつづけた

そして3人はなんとか北扉へ着いた

ガチッ

玲『そんな…』

雫『どうしたの!?!』

玲『開かねえ…』

雫『そんな!だって…来たとき開いてたんだよ!?!』

玲『あっ』

玲は何かに気付きそれに向かっていった

雫『玲？』

玲『これさ』

玲が指差す先には緊急時に必要な物が入っている箱だった

雫『どういうこと？』

玲はその箱を漁り斧を取り出し雫に見せた

雫『なるほどね』

こうして3人は廃旅館から脱出した…

滯は精神に大きな傷を負っていて言語障害になり数日後発見された
海は記憶喪失になっていた…

これが私の人生最悪の夏の思い出です…

最終話 夏の思い出…（後書き）

呪いのトンネルと身投げの吊り橋の話がノンフィクションで他の三話はフィクションです。四人とも無事ですが遊びで心霊スポットに行くとは本当に何かが憑いてくるかもしれません…現に車のフロントバンパーは左右見事に手の形にへこんでいましたから…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3280c/>

夏の思い出…

2010年10月16日02時00分発行